

子どもの内的成熟を生み出す保育の過程

— ある自閉症児の描画を手がかりに —

佐治 由美子 (愛育養護学校)

【問題と目的】

内的成熟とは、子どもの内面的な充実による成長を表す用語である。津守(1980)は、保育の成果を捉える観点として三つを挙げている¹。第1は、たとえば幼児期の終わりまでに到達する個々の能力をもって成果とする考え方。第2は、保育活動において目に見えるものを成果とする考え方。そして第3は、子ども個人の内的成熟をもって成果とする考え方である。この三つの中で、最も目に見えにくいのが第3の観点である。だからこそ「それぞれの子どもが、その能力や状況に応じて、十分に生活できるようにする保育が重要²」と津守は述べる。大人の目に映る成熟のイメージが先行するならば、子どもにとってそれが外圧となって働きその子ども自身の成長を妨げる場合があることを、保育者はいつも意識しつつ保育に携わることが大切になる。

さて、本研究では、子どもの内的成熟を内に含む保育の過程を、子どもの描画を手がかりに明らかにすることを目的とする。外側からは見えにくい内的成熟を捉えようとするその手がかりとしては、子どもの言葉による表現を用いる方が一般的かもしれない。しかし、ここでは、言語よりも描画の中により多く内面の表現を行ってきたある自閉症児の作品を取り上げる。普通の子どもと異なり特殊な例を扱っていると思われる向きもあるかもしれないが、子どもが十分に生きる生活があれば、障害のあるなしにかかわらず、子どもは内面の充実を作品という形の中に残してくれる点は共通であることを提示できれば、と思う。

【方法】

筆者は、愛育養護学校(特別支援学校)の研究員の立場にあり、週に二日保育に入りながら、職員や実習生と共に日々の保育について考えている。本研究は、保育の日常を過ごす筆者の実践事例の検討をその方法とする。個別性重視の研究が保育学の普遍性に通じるかと問われるならば、一つひとつの個別の事例を掘り下げていく研究の中から人間の普遍的な姿が浮上してくるという意味において、ここでの事例は一つの典型として扱えるものと筆者は考える。

また、この事例に登場する子どもは、本校6年生の男児Rである。本児は、2歳時に、医療機関において自閉症の診断を受けている。

【事例の概要と考察】 (事例の詳細は当日画像で提示)

筆者がRと出会ったのは、3年生在籍時であった。当時から現在までほとんど変わらない姿としては、学校の中に自分の居場所として一部屋を確保して扉を

閉ざし、限られた大人を必要に応じて室内に呼び入れて過ごしてきた。高学年になるにつれ、個室に限らず職員室や調理室などの共有スペースを選ぶようになってきている。Rの言葉遣いは滑らかではないが、必要なやりとりは単語か短い文章で伝える。日常会話は少なめでも、遊びの中でイメージをやりとりする際には、言葉も身体の動きも滑らかで、表情も豊かで生き生きとしている。学校で展開されるRの主な活動は、タブレットPCやノートPCを駆使してインターネット上で様々な画像や動画を検索し、それをスクリーンショットで撮影して写真のカメラロールに保存して集めることであり、そこに長時間を費やしている。が、これはただコレクションとして楽しむのではなく、その画像をきっかけとして描画や工作に取り組んだり、ストーリーをつかって劇遊びへと発展させたりする。

ここでは、Rの描画を中心にした活動の展開を、事例として取り上げていく。

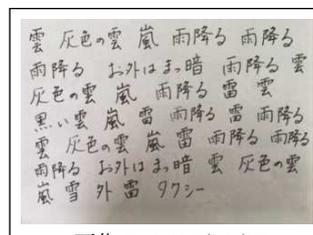
〈事例1〉 ～外側からの脅威～



画像1-2018/5/15

画像1は、Rが大型船を描いた作品の三枚目。嵐に遭った船は、横帆を張るマストが二本とも折れ、船を推進させる外輪もぐらつき、船体も至るところが傷ついている。船の前後には、Rの

言う「ボシャーンの波」が上がり、船は進むべき方向すら失っているようである。この三枚目を描き終える頃、Rは「壊れた」とつぶやいた。2018年度になり、Rは描画の中に、嵐や地震などで壊された船や家などの様子を表現するようになったが、この画像1はその最初の作品である。



画像2-2017/10/12

Rは、以前からネット検索により雨や雲、雷、雪などの気象関係の画像を集めることも多く、やがてその画像のイメージは、言葉として再編成されるようになった。ある時、Rの口から発せられた

その言葉を紙に書き取るようにと、筆者に黒の油性ペンが渡された。画像2は、その言葉を筆者が書き取ったものである。Rの発する言葉は滑らかでリズムカル。まるで、詩を朗読しているような趣である。ここで生みだされるリズムは、単なるリフレインではなく、降りかかる雨風に抵抗して進むために必要な“リトルネロ³”だったとも言えるだろう。「雨降る 雨降る 雨降る…」と繰り返

返されるその声は、次第に強まる雨の勢いすら感じさせた。灰色の雲に覆われ、外は暗い。雨が降りしきる中で雷は鳴り、やがて雪も降り出すのだ。抵抗しつつも困り果てていると、そこにタクシーが迎えに来て・・・というストーリーが語られていたことは、すべての言葉を書き取った後に、筆者に了解された。それは、その頃に繰り返していた劇遊びで、学校からの帰り道(姉と二人で家に向かう設定)に雨に遭いタクシーに乗って母親の待つ家に無事に帰るというストーリーが演じられていたことを思い起こさせるものであった。

画像1の大型船も**画像2**のストーリーの主人公も、雨風に外側から見舞われるその状況が描画や言葉で表現されている。自分の外側にある脅威に対してどのように抵抗しかつ身を守るかということ、Rはこれらの活動の中で模索していたように感じられる。このことは、自然のもつ脅威ということに限らず、子どもたちが圧倒されそうなことに出合ったときに、無力感を覚えながらも自力で立ち向かい、その手応えから自信を得ていくという成長のプロセスに重なり合うことが予感される。

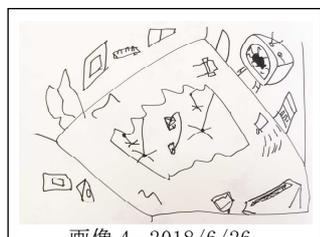
〈事例2〉～内側からの脅威～

Rは、スタジオジブリによるアニメーション映画『ハウルの動く城』を映像ソフトで好んで見ていたのか、自己流にアレンジした描画を、ときおり行っていた。



画像3- 2018/6/26

画像3は、ハウルの城が崩れ落ちる瞬間を捉えた作品である。火の悪魔カルシファーによって、城の歩行だけでなく内部の照明や調理まですべての消費エネルギーが供給されていたハウルの城が、崩壊寸前である。鳥に似た4本足は、よるめいたのか街灯をなぎ倒しそれを踏みつけている。城の推進器として用いられていたらしい外輪も城壁から外れ、地面に転げ落ちている。



画像4- 2018/6/26

画像4は、崩壊したハウルの城の内部を描き出した作品である。室内の扉や床のあちこちにヒビが入り、テレビの画面は割れてしまっている。この作品を手がけたRの視点は城の上部にあり、部屋の四方の壁は天井に向かって立ち上がると同時に、上から見下ろされた床は抜け落ちて地面が見通せる状態になっている。そこには城を移動させる4本の足とその足に踏みつけられる寸前の街灯が見える。

この城は、雨風に遭って崩れたのではなく、城の内部に不具合が起こり、その内側から崩壊したのである。『ハウルの動く城』のストーリーによると、カルシファーの魔力により燃えていた城のかまどの火に水がかかっ

たために、ハウルの城は燃料切れを起こし内側から崩れ落ちてしまった。このときのカルシファーは、ハウルとの契約に縛られ城を動かすのに火の魔力を用いざるをえなかったが、城の崩壊によりその契約が解かれて自由になると、カルシファーはハウルの命令ではなく自分の意思で、城の形を変えて再生させ、新たにその城を動かすことができるようになる。この日の**画像4**の作品の後に、Rは新たに部品を装備した城が坂道を上り始める絵を描いた。その頂きには、崩壊時になぎ倒された街灯と同様の灯やロウソクらしきものが光を放ち、城が新たなエネルギーに生かされていることが表現されていた。

Rは、ハウルの城だけでなく、家や電車などの乗り物の内部を詳しく描写する絵を、数多く描いてきた。安心して自分自身を寛がせることのできる内部空間を多様につくり出してきたが、前年度までは自分ひとりだけが住まう空間であったものが、今年度になり室内でペットを飼うことになったり、学校の友だちを招き入れて一緒に乗る乗り物を描いたり、次第に仲間との共生へと彼自身が開かれ始めていると感じさせている。Rは、現時点でも部屋に閉じこもりやすいところは表向き変わっていないが、その内面においては、自分をコントロールし安定させる拠り所を築き、内から外へと心の扉を開きつつあるのでないと思われる。

【まとめ】

本研究では、主にRの描画を通して、子どもの内的成熟が生みだされる過程を検討してきた。ここで確認しておきたい点は、子どもが成熟するよう導く保育とは異なるあり方として、子どもの内的成熟が起こる瞬間に立ち会いそれを支え続ける保育の重要性である。

自閉症の診断を受けている子どもたちは、対人関係の中で表出される情緒的な表現が弱いために周囲に理解されにくく、内面に過度の不安を抱えている場合が多い。しかし、保育の営みにおいてひとたび遊びの世界が共有されると、彼らは安心して自分のイメージを表現したイメージのやり取りも活発に行うようになり、次第に生き生きと遊び始める。その表情は、多くの子どもたちと何ら変わるところはない。障害を抱えている子どもたちが、その障害を自らに引き受けて堂々と生きていくことは、十全に自分の生を生きるという意味においてどの人にも共通に与えられている価値である。子どもが生きまた保育者が生きるということも、同一の価値の下にある。この意味において、子どもと大人が学び合う関係にあるときに、その保育は相互に成熟を生みだすものとなるであろう。

1 津守眞『保育の体験と思索』大日本図書、1980、pp304-305

2 津守眞 前掲書 p305

3 G.ドゥルーズ/F.ガタリ『千のプラトー』河出書房新社、1986

ドゥルーズとガタリは、音楽用語であるリフレインを哲学用語化し、反復のもつ閉鎖性を解き放ち、差異を折り込みつつ開かれていくものとしてリトルネロを考えている。